

本『いつかの約束1945』から 考えた平和と今私にできること

第一小学校 四年

米 倉 きいと

わたしは、すずちゃん戦争を体験していましたがとても心にのこりました。すずちゃんが少しずつ昔のことをがんばって思い出しているところが、(すごいなあ)と感じながら、この本をむ中になって読みました。

わたしは、すずちゃんみたいに戦争を体験したことがないです。でも、最近戦争のことを知りたい、調べてみたいと思いました。なぜ、戦争は起きてしまったのかな、戦争の時の生活はどんな生活だったのかなとたくさんの方が頭をうかびました。

この夏にひめゆりのとうに行ってきました。たくさんひめゆりの女の子たちの一人一人の写真がはってありました。実に戦争で生き残り、今も生きている人にインタビューした動画が流れていました。暗いどうくつの中でアメリカ軍に見つかってしまい、大きな音がしたので明りをつけたら、友だち全員が死んでしまったそうです。みんないつ命をうばわれてしまうか分からない、いつ命をうばわれてもおかしくはない、そんな苦しく不安ときょうふを毎日感じながら生活していたそうです。この戦争のおそろしさとひさんな現実を今生きて

いるわたしたちに伝えたいと言っていました。

すずちゃん

「戦争は大変なことでも今とは全然ちがう。今はとても平和。戦争がなくなるように、ずっと平和でいられるように、自分たちにできることをした方がいい。」

という言葉がひめゆりの人の言葉と重なりました。戦争は、人を苦しめます。そして幸せな生活も大切な人もうばってしまいます。今までも戦争は、こわくて苦しいことだと分かっていましたが、実際に本を読んで、ひめゆりのとうに行つて、戦争の本当のおそろしさを実感しました。

今でも世界のどこかで戦争が起きています。戦争が一日でも早く世界からなくなつてほしいと強く思いました。七十九年前の戦争を体験した人は、とても少なくなつてしまっています。戦争を体験したことのないわたしたちに今できることは何だろうと本を読みながら、たくさん考えました。きつとわたしにできることは、戦争がどれだけおそろしく、こわいものなのか、この平和で幸せな生活を一しゅんでこわしてしまうものが戦争だということを、わたしもだれかに伝えていくことだと思えます。伝え続けていけば、それが平和でいられることにつながる第一歩だと思います。

すずちゃん大切なことを教えてくれてありがとう。

戦争はあつてはならないこと

第二小学校 四年

松 永 杏

みなさん、今、日本が一番幸せなことを知っていますか。海外では、戦争がおこっています。二〇二二年ごろから今まで、ロシアとウクライナが戦争をしています。

海外では、日本にくらべてご飯が食べられない子どもなどがたくさんいます。私達のご飯を食べられていることは、当然ではありません。日本には、食料がたくさんあることも幸福です。

昭和二十年八月六日、広島に原爆が落とされ、その三日後に長崎に原爆が落とされました。広島では、約十四万人の死者ができました。長崎では、約七万人の死者ができました。合わせて約二十一万人もの死者ができました。それ以来、日本に原爆は落とされていません。

原爆が落とされた日本は、戦争をしないことをちかいました。なぜなら日本は、原爆や戦争でもう人を死なせたくないという思いから、戦争をしないことをちかいました。

戦争では、戦車やじゅうなどを使います。ロシアとウクライナの戦争では、大人が戦争の手伝いをさせられたりして、死んでしまう人もいました。とても悲しいことです。

そして、今、世界は幸せなのかと聞かれて、笑顔でこの世界は、幸

せですとは言えません。なぜなら、戦争をしているからです。戦後に生まれた私達は戦争を経験していないことは、幸福かもしれません。戦争は、あつてはならないことです。ニュースなどで戦争の映ぞうを観るだけでこわいです。もしかしたら日本も戦争が起きてしまうことを考えると、戦争は、したらいけないものです。

私は、ニュースと本で勉強しました。

私は、戦争がぜつ対あつてはならないことだと思いました。

広島の世界遺産

第三小学校 六年

室 伏 埜 乃

私は、夏休みに広島県の平和記念資料館へ行きました。私は少しドキドキしながらも館内へ入りました。

私が印象に残ったのは一人の女の子の写真でした。白黒でも分かるほど全身が血まみれで、右うでの肉はえぐれていて、とてもつらそうな顔をしていました。まるで、助けてとうったえているような悲しい顔でした。私はその女の子の顔が今でも忘れられません。

(助けてあげたい。他の人も助けてたい。)

私はずっとそう思っていました。

私は少し泣きそうになりながらも先に進みました。そこには、臨時

救護所となったテントと、やけどや傷を包帯で巻かれ、苦しそうな子供の写真がありました。その時となりの女子三人組の一人が、「可哀想だよ。」

と泣きながら言っていました。その言葉に私も共感しました。

少し先に進むと、被爆して亡くなった人達の遺品と遺言が展示してある場所がありました。三輪車とヘルメット、真っ黒々になった息子のお弁当。遺言では、

「助けてあげられなくて、ごめん。」

「熱いよ！痛いよ！。」

と色々な遺言がありました。館内のすべての空気が、とても重く、誰一人笑っている人はいませんでした。

（怖い。なんで罪もない人達が死ななきゃいけないの？どうして戦争なんかするの？）

色々な感情がこみ上げてきました。

少し心を落ちつかせて、私は核爆弾の展示を見ました。広島で使われた核爆弾には、ウラン二三五という石が使われ、それを人工的に壊すと、人体に危険な放射線を放出します。

このような原理でつくられた核爆弾が約十四万人を殺しました。

そして私は次に、原爆ドームへと向かいました。原爆ドームは思っていたより少し小さかったですが、実際に核爆弾によって破壊された建物なんだ、と圧倒されました。

私は平和記念資料館と原爆ドームを見て、戦争は悲しみしか生まない、良いことなんて何も起きないということ改めて思いました。

これからは、私ができる範囲で原爆のことを他の人達に伝えていきたいと思います。

思いやりの心

第三小学校 六年

小松 寛之介

みなさんは、平和な世界とは、なんだと思いますか。ぼくは、差別もなく、暖かい布団でねて、おいしいごはんを食べることだと思えます。

では、今、世界は本当は平和なのでしょう。

日本は、平和主義で、戦争をしません。他の国は、ちがいます。例えばロシアです。二〇二二年二月二十四日にウクライナを包囲していたロシア軍が侵攻を開始し戦争が始まりました。そしてウクライナの方で国のため家族のために命を落とした兵士が約三万人もいました。命を落としたロシア兵士は、五万人をこえたと報じられました。

兵士だけではなく民間人も命を落としています。ウクライナ領内で一万人以上の民間人が命を落としています。

どちらかが戦争に勝つてもうれいなんて気持ちは、一つもなくただ悲しいという気持ちだけが残ります。だから戦争は、国にとっては、メリットがあるかもしれませんが、人々にとっては、デメリットしか

ないのではないでしょうか。だから、ぼくは、おたがいの考えを理解し尊重し合い、思いやりの心を持つことが大切だと思います。

戦争だけでなく差別もあります。

病気による差別、黒人差別など、いろいろな差別があります。

差別は、人の命をうばうこともあります。差別が理由で戦争がおこることもあります。だから、差別もなくなつてほしいと思います。

ぼくたちの気持ち、言葉、行動でだれかが命を落としてしまうかもしれない。

ですが、逆にみなさんの「戦争はやめよう」「差別はよくない」という声や気持ちがたくさん集まれば、きっと何かを変えられると思います。

そして、何かを変えられたならきっと世界に明るい未来が待っているとと思います。

ぼくは、この作文を通して思いやりの心がある人になりたいとあらためて思いました。

広島に落とされた原子力爆弾

第五小学校 五年

鈴木 さくら

私は、原爆が落とされた当時の物が展示されている、広島平和記念資料館に行ってきました。

展示されていた物は、ひ爆した人が当時着ていた物や持っていた物がありました。それと生き残った人などが描いた絵がありました。他にも品と一緒にい族の言葉が書いてありました。中には、い体やいと、一しゅんで炭のようになったそうです。また、生き残った人は、衣服が破れ、皮ふがただれ、水を求めて川へ飛びこんでいきました。そのせいで、川にはたくさんのお体がうかんでいたそうです。

原爆のひ害はこれだけでは終わりませんでした。原爆が落とされた時に放射線をふりまき、ひ爆後、広島に助けに来た人も何十年にもわたって白血病で苦しみました。

展示されていた写真には、顔のパーツが分からないくらいのおどいやけどをおった人の顔や、放射線のえいきょうでかみの毛がぬげ、黒いはん点が体中にている兵士の写真がありました。

絵には、皮ふがただれて黙々とこう外へにげていく人や、のどがかわき黒い雨を口で受けとめる女性の絵がありました。その黒い雨粒は、

放射能を帯びていました。他には、黒い雨がふったあとが残っている
白いかべや、住友銀行広島支店の階段は、強烈な熱線により、白っぽ
く変色し、人が腰掛けていた部分が影のように黒くなって残った人影
の石が展示されていました。やけどのえいきょうで、残ってしまった
ケロイドを切りとった物もありました。

私は、資料館に行つて原爆のひ害や、ひ爆当時の物を目にやき付け
て来ました。グロテスクになりすぎないように、展示しているの
で、本当はもっとひどい物だったと思います。以前読んだ、『はだしのゲン』
は、当時六才だった作者が実に体験したことを元にかいているの
で、その悲さんが展示されていたものよりもっとひどかったと思
います。

原爆はもう二度と使用してはいけなものです。ひ爆した人は、年々
へってきていますが、それでも、私たちわかい人が後世にその悲さん
さを語り続けていくことが大切だと思います。

今回広島にいつて、悲さんな歴史にも、目をそむけずにむき合うこ
とが大切であると改めて分かりました。そして、これからは、戦争が
なくなつてほしいと思いました。

「ただいま」

「おかえり」が言えない

片浜小学校 六年

宮 脇 歩 夢

僕は戦争を知らない。他の国の戦争の話をニュースで見ると

「○人死亡しました。○人がけがをしました。」

と毎回聞こえてくる。すごく怖くて見られない。

「日本は平和でいいね。」

とお母さんと話した。

そんな時、僕が見ていたショート動画に、特攻隊員の遺書というも
のが流れてきた。この時に、特攻隊員がみんな若かったと知った。一

番若い人で十六歳。

「十六歳って、僕があと四年したらつてことだよ。無理だよ、自分だつ
たら行けない、いやだ。」

この頃の日本に生まれなくて良かったと思つてしまった。

特攻とは、航空機や魚雷に人を乗せたまま敵艦に体当たりさせる特
別攻撃のこと。それに乗るのが「特攻隊員」だ。「特攻」と言う言葉を
調べてみて、特攻隊員は戦争に行つたら帰つてこれないんだ。その
まま死んでしまうんだと思つた。死ぬのが分かつていて出撃する人、
帰つてこないことを分かつて送り出す人。

「いつてきます。」

と言ったら

「いつてらっしゃい。」

と返ってくる。

「ただいま。」

と言ったら

「おかえり。」

と返ってくるのが当たり前だと思っていた。でも、行ったら行ったきりになってしまふのが当たり前のような時代では、「ただいま」と「おかえり」の言葉を言うのが難しいことなんだと分かった。

出撃する前に手紙を書いた特攻隊員たち。その手紙は、何を書いても「遺書」ということだ。手紙の中に、「心晴れやか」「笑ってゆきます」「後悔はありません」などと書かれていたが、「なんで？」

と思った。全然分からなかった。これから死んでしまうのに。死んでしまうから？

本当は、もっと生きてやりたいこととかあったと思う。その気持ちを隠して書いた手紙。読みながら苦しくなった。この手紙が相手に届いた時には出撃後。受け取った方はどんな気持ちだったんだろう。そんなことを考えたらもっと苦しくて辛くなった。

「日本は平和でいいね。」

と普通に話していたけれど、今の日本の平和があるのは昔の人たちが命をかけて守ってくれたからなんだと改めて感じた。

僕は今日、特攻隊について少し知ることができた。

「戦争の辛さや悲惨さは経験した者にしか分からない。」

と聞いたことがあるけれど、「戦争をして幸せになる人はいない。」ということは分かる。

命が戦争でうばわれる

金岡小学校 五年

下里 碧

私たちが住んでいる日本では、今は戦争がおきていません。しかし、他の国では戦争がおきて苦しんでいる人々がいます。最近のニュースでは、ウクライナとロシアでおきている戦争が報じられています。ウクライナは、学校や家がおわされ、どちらの国の兵士や一般人もまきこまれ、多くの人の命がうばわれています。一般人もまきこまれ、とてもかわいそうだと思います。

日本は、今は平和ですが、昔の日本も戦争でとても苦しんでいたことを『火垂るの墓』を見て知りました。

『火垂るの墓』では、そこら中に火がまいていきました。そして、ご飯の量が少なく、家族と一緒に過ごすこともできず、家がない人もいました。

「私には家がある。お母さんお父さんがご飯を作ってくれる。家族と

一緒にいられる。この時代に生まれてよかった。」

と思ってしまう。しかし、私が昔に生まれて戦争の時だったらそんなことを言っただけ分かります。なぜなら、家族を守るために戦っている人たちがいるからです。戦争後に生きのびた人は、お金や住む家、家族をなくした人がたくさんいたと思います。想像するだけで、とても悲しい気持ちになります。そんな世界は、だれも楽しくないです。命を大切にして生きようとしている人の命までも戦争でうばわれてしまいます。そんな戦争をだれもがいけないことだと知っているはず。しかし、戦争はなくなりません。

なぜ戦争をするのでしょうか。どうして、生きようとする命をうばっても戦争があるのでしょうか。

私には、戦争をおこす人たちの気持ちが分かりません。戦争をすることを望む人がいるかぎり、戦争はなくならないことにも悲しいです。私は平和な世界のほうが好きです。家族や友達が笑っている幸せな気持ちになります。世界中の人々が、仲よくしてくれば、戦争はおきずに平和な世界になるのではないのでしょうか。私はそんな平和な世界を望みます。

『戦争』それは、私にとって生きようとしている人たちの命をうばってしまうこわい行動です。今でも他の国で戦争がおきています。私は、みんなが楽しく生活できる、戦争がおこらない世界になってほしいです。そして、家族、友達が笑顔で幸せに生活してほしいです。

平和な世界

大岡小学校 五年

板倉伊織

「平和」って、どういうことなんだろう。

ぼくは、みんなが笑顔で過ごすことができること、けんかをしたりしないで仲良くできること、おなかいっぱいおいしいご飯が食べられること、安心してねられる家があること、大好きな友達とたくさん遊べること、こういういつもの生活の中にあることも全部、平和ってことなんだと思います。

ぼくは毎日平和に過ごしているけれど、テレビでは外国で戦争がおこっているというニュースが流れることがあります。ぼくはそれを見て、どうして仲良くできないんだろうと、かなしい気持ちになりました。

おじいちゃんやおばあちゃんの話では、昔は日本でも戦争があつて、たくさんの方が死んでしまったり、家がこわれたりしたと聞きました。食べる物もなくてとても大変だったそうです。考えただけでもつらいなと思いました。そんなかなしい事が起きないように、みんなが仲良く笑って元気にくらせるようになればいいのになと思います。

身近なところだと、学校ではみんな仲良くすることが大切だと思います。考え方がちがっても、相手の話をしっかり聞いて、みんなで話

し合ったりすればいいと思います。そして、悪いことをしてしまったり、友だちになんか悪い思いをさせてしまったときは、ちゃんとあやまれるようにしたいです。

平和な世界にするためには、一人一人が小さなことから気をつけていくことが大切だと思います。例えば、笑顔であいさつをすること、友達を大切にすること、そして、ポイすてをしたり、むだ使いをししたりしないで地球を大切にすること。小さなことでもみんなで力を合わせれば、きっと平和な世界を作ることができると思います。

そして、平和のためには、自分から思いやりのある行動をすることが大切だと思います。困っている人に声をかけたり、ごみをひろったり、できることはたくさんあると思います。みんなが笑顔で過ごせるように、これからも平和のために、ぼくができることを一つずつやっていこうと思います。

なにが平和か

愛鷹小学校 五年

土屋 健太

ぼくは、今まで平和のことについて考えたことがなかったので、これを機にぼくなりの平和について書きたいと思います。

まず何が「平和」なのかと考えたときに、「差別がなく人類がみな平

等であり、世界から戦争が無くなる」ということだと思いました。

今ぼくが何不自由ないくらしができてきているのは、昔におこった第二次世界大戦で、日本は負けてしまったけれど、その戦争で日本のために命を落としてまで戦った方々がいたからこそだと思っています。

戦争では、どんな戦いがくり広げられていたか、ぼくは、くわしくは分からないけれど、調べてみたら「特攻隊」というものがあつたことを知りました。

特攻隊は若い人たちがぎせいになっていることを知り、しょうげきを覚えました。

飛行機でせんかんに体当たりしたり、「回天」という魚雷、本当にしょうげきてきでした。その当時、日本軍には人間の命をかるんじた作戦があつたんだなと思いました。

沖繩での戦争は「少年ゲリラ部隊」というものがあつて、ぼくと同じ年れいの子もいて、言葉になりませんでした。

そういう戦争でぎせいにならざるをえなかつた人たちがいたからこそ、命をそまつにしてはだめなんだということも覚えました。今の日本には戦争はないけれど、戦争が二度とおこらないように、今のぼくたちが大人になったときにしっかりとしていかなければいけないと思いました。

今ぼくができることは、友達と仲良くし、親とたくさん会話をし、学校でたくさん学ぶことだと思っています。

世界には、日本でもそうだけれども、親とはなれてくらす子も中にはいて、ぼくは本当に幸せなかんきょうにいると思いました。

ぼくには四つはなれた姉がいます。

姉は「ダウン症」です。喜怒哀楽がはっきりしていません。会話という会話はちゃんとできないけれど、家族だから、姉の伝えたがっていることは、少しは理かいできます。

そういうしょうがいをもった人たちにも、へんけんの目をみせず、平等に接していきたいです。

だから「平和」というのは考え始めたらきりがないかもしれないけれど、ぼくが今できるはいいで行動でしめしていきたいと思いました。

私は、戦争を知らない

愛鷹小学校 五年

山地 夏未

私は、戦争を知りません。

戦争は、国を守るためにやっているのだけれど、自分の国も相手の国もひ害にあうのです。

自分たちの仲間もいなくなるかもしれないのにどうして、そんなにやりたがるのだろうか、ずっと思っていました。

だから、戦争の映画の『島守の塔』や、『空母いぶき』を見ました。最初に見たのは、『島守の塔』です。『島守の塔』は、沖縄の空しゅうの映画です。空しゅうが一番こわかったのは、空からばくだんが落ち

てきて、何人も人が死んでしまったことです。お買物をしている人や、物を売っている人のように、色々な人がいっしゅんの間で、血を流してたおれていました。

私は、血を流している人を見て、これ以上先は、こわくて見られませんでした。あまりにも衝げき的で、悲さんすぎてこわくなってしまいました。

日を置いて、『空母いぶき』を見ました。『空母いぶき』は、自衛隊が、せめて来る他の国から、日本を守るために戦う話でした。『空母いぶき』で、「戦争」ではなく、「戦とう」という言葉が出てきました。戦とうは、「自衛のための戦とう」だそうです。

「日本は、戦争をしない国だ。」「日本は、戦争をする力を持っている。しかし、絶対にやらない。」と内閣総理大臣が言っていました。

本当にそうだろうかと私は、思いました。

私は、戦争と戦とうは、同じだと思えます。なぜなら、どちらもせめて来た敵に対して、ミサイルをうっていたからです。

自分たちの国を守るため、防衛出動があります。しかし、一歩まちがえたら、戦争が始まってしまうと思えました。だから、どんな事があっても、かたきをとるのではなく、おたがいがどのようしたら、幸せでいられるのかを考え、行動していかないといけないと思えました。

つらくても、悲しくても、犠牲をはらっても、どんな時も、ふみとどまることが大切です。

だれも、不幸になることを願ってはいません。

今、日本は平和です。他の国の人たちも、日本に旅行に来てくれます。私達は、あたり前のように勉強をすることができます。ご飯もしっかりと食えることができます。

そんな平和な日が世界で広がるとうれしいです。

世界は一つ、みんな友達なのです。

平和が一番

愛鷹小学校 五年

熊谷 栞那

平和がいい

ずっと平和に生きたい

戦争なんてやりたくない

早く終わってほしい

良いことはないから

平和になりたい

平和がいい

幸せがいい

ずっと幸せに生きたい

戦争なんかやりたくない

早く分かってほしい

良いことはない

幸せになりたい

幸せがいい

平和が一番

ずっと平和に生きている

戦争なんてもうやらない

良いことがないから

平和をもっと

知ってほしい

平和が一番

幸せが一番

ずっと幸せに生きている

戦争なんかもうやらない

やってはいけないことだから

幸せをずっと

続けてほしい

幸せが一番

平和を願う

愛鷹小学校 六年

杉山 葉大

ぼくは今、幸せです。大好きなサッカーもできているし、学校にも通えています。家族とも一緒にいます。

今、他の国では、戦争が起きています。テレビのニュースで家や学校、病院などに、ミサイルが落ちて、グチャグチャに破かいされている様子や、ケガや家族を失った人達を見ると、とても悲しい気持ちになります。今は、日本では戦争は起きていませんが、ぼくのそう祖父は、戦争を経験しています。中国で馬に乗って戦っていたそうです。手も大きくて体の大きいそう祖父だったので、かっこよかったと思います。仲間も何人も死んでしまった話を聞いてとても怖くなりました。戦争が終わって、電車で家に帰る時、広島を通った時、見えないはずの海が見えたからおかしいと思ったそうです。次の日明るくなってから、広島に原爆が落ちたと知ってとてもびびくりしたそうです。その話がぼくにとって、一番覚えていそう祖父から聞いた話でした。ぼくが一年生だった時、広島の前爆ドームと平和記念資料館に行きました。そこで人がこげた写真やこげたお弁当などがあり、とても怖くてあまり見られませんでした。それからぼくは、戦争という言葉を聞いただけでも、怖くなってしまふようになりました。

戦争をなくすためにはどうしたらいいと思いますか？ぼくは、ミサイルなど世界から無くしたほうがいいと思います。国と国が仲良くできれば平和になると思います。

今ぼくが、作文を書いている時でも戦争で人が死んでいます。家族が死ぬなんてぼくは、とてもとてもいやです。大切な人が近くにいる今を生きているぼくたちは、とても幸せだと思えます。今を大切に生きたいと強く思います。

世界中を仲良くさせるのは無理かもしれないけれど今の平和な日本がずっと続くことを、願っています。そしていつか世界中が戦争のない平和な世界になることを心から願っています。

心に残る一つの本

愛鷹小学校 六年

佐藤 圭吾

今年も広島、長崎の原爆の日がやってきた。毎年テレビで放送される式典を何気なく見ていたぼくだが、今年はずが違った。なぜなら、僕は六年生になり、社会の授業で平和主義を学んだからだ。日本国憲法第九条で、戦争放棄、戦力の不保持、交戦権を認めないという平和主義を制定している。すなわち、戦争をしない、軍隊をもたない、戦争をする権利すら認めないということだ。

日本の国が、戦争に対してここまできびしい法律を作ったのは、い
うまでもない、第二次世界大戦で広島と長崎に核爆弾が投下され、甚
大な被害を受けた世界唯一の核被爆国となったからである。

ぼくは、もちろん戦争も知らないし、核爆弾も知らなかった。しか
し学習していくうちに、核爆弾とは、たった一発の爆弾が爆発する瞬
間に、猛烈な爆風と熱線、放射線が出るという恐ろしい兵器であるこ
とが分かったのである。

ぼくは、低学年のころ、市立図書館から、『ひろしまのピカ』という
絵本を借りて、母と一緒に読んだことがある。それから何年かすぎた
今でも、まっ赤に燃えさかる炎のような表紙の絵は鮮明に覚えている。
お話の主人公、みいちゃんの家が八月六日の朝ごはんを食べている
時に核爆弾が落とされた。燃えさかる火の中に入ってお父さんを助け
たが、お父さんのお腹には穴があいていた。川にはたくさんの人が死
んでいて、生きていても顔がただれ、必死に水を求めていた。みいちゃ
んの耳の中からは、しばらくたってからでもガラスの破片が出てきた。
みいちゃんは年月がたってでも大きくならなかった。断片的だが、こん
な話や場面が脳裏に浮かんでくる。

今さらながらだが、この『ひろしまのピカ』の話が広島に投下され
た核爆弾であるとながった。たった一回ピカッと光っただけで、広
島では約十四万人もの人々が命を失ったのである。本を読んだころの
ぼくは、ただただこわいお話、恐ろしい絵本で終わっていたが、核爆
弾を学ぶことで、これは絶対、二度と兵器として使われてはいけな
い、強く思うようになった。

ぼくは、戦争を知らないし、被爆したわけでもない。しかし、世界
唯一の被爆国である日本に住んでいる。被爆の現実や恐ろしさを見た
り聞いたり、あるいは感じたりできるチャンスは、他の国に住む人よ
り何倍も何十倍もあるはずだ。だからこそ、もっと学ぶことで核兵器
は絶対に作ってはいけないことを世界に伝えていかなければならない
と思う。

ぼくはまだ、広島の大原爆ドームや長崎の平和公園には行ったことが
ない。ぜひ訪れて自分の目で確かめたい。

戦争はおそろしい

大平小学校 四年

繁松 蒼

ぼくは、戦争について何も分かりません。だから、お母さんとい
こと一緒に「平和のための戦争てん」を見に清水町の福しセンターに
行ってきました。そこには、戦争についてのパネルがてん示されてい
ました。パネルには、戦争当時のこと以外にも、戦後の後いしよや
差別に苦しんだ方のお話が書かれていました。パネルをお母さんが読
んでくれました。それを聞いてとてもこわくなりました。

原子ばくだんでやけどをした写真を見て、ちょっとこわい、気持ち
が悪いと思っしまいました。そして、写真を見ていくうちに悲しい

気持ちも大きくなりました。

特に印しように残ったのは、しげる君という中学一年生のが書いてあったパネルです。お母さんの作ったお弁当を持ってそかい作業に出かけたところ、ひばくしたそうです。

お母さんがしげるくんをさがしに行ったら、しげる君がお弁当をおなかの下にかかえるようにして、なくなっているのを見つけたそうです。しげる君が食べることができなかったお弁当箱の写真は、真っ黒にこげていました。ぼくは、お母さんの作ったお弁当を食べて家に帰りたかったんだろうな。お弁当箱を最後まで大事にかかえていたんだろうな。と思うとつらい気持ちになりました。なくなった人だけではなく、生き残った人も、やけどや病気などの後いしょうで差別をされたり、せい神的にも苦しかったそうです。自分と同じくらいの年の子どももひばくしてしまいかわいそうだと思います。ぼくが今この立場だったら、いやだなあと思うし、今は幸せなんだと感じています。なぜなら、戦争の時は食べるものが少なかったようだけれど、今はおなかいっぱい好きなものが食べられるし、お父さんは、戦争に行かなければならなかったけれど、今は家族みんなそろって一緒にいられることが幸せだと思ったからです。

今回、戦争のことを勉強してみても、戦争は起きてほしくないし、やってはいけないんだと強く思いました。今、世界でおきている戦争も早く終わって、みんなが幸せになるといいなと思いました。

これからも、戦争があったことを忘れないようにし、一日一日を大切にしていきたいと思います。

わたし達が 忘れてはいけないこと

大平小学校 四年

飯塚 律帆

「お国のためにな、みんな行くんだよ。だから、いやだなんて言ってもらえるもんか。」

あの日の沼津駅を思いうかべながらさみしそうに話す、ひいおじいちゃん。国語のじゅ業で勉強した『一つの花』で、ゆみ子のお父さんが戦争へ行く場面と全く同じだった。

（本当は行きたくないのに、どんな覚悟でひいおじいちゃんは駅へ行ったのだろう。）

とわたしは思った。

わたしには、戦争を知っている百さいのひいおじいちゃんがいる。百さいとは思えないくらい元気なひいおじいちゃんは、わたしの知らない昔の話をたくさんしてくれる。でも、戦争の話になると、ひいおじいちゃんから笑顔がなくなる。そして、わたしの目を見ながらゆっくり、ゆっくりと話し始める。戦争というものがどれだけ残こくな出来事だったのか、たくさん聞けば聞くほどわたしはつらくて悲しい気持ちになった。

今の時代からは想ぞうできないほど、大変なけい験をしてきたひい

おじいちゃんに、今の生活が平和なのか聞いてみようと思った。すると、

「今はな、めぐまれすぎだ。おじいちゃんがわかいころはなあ、不自由したもんだ。生きていくためにみんな必死だったからなあ。」

と言われた。その言葉を聞いて、わたしは、はっとした。なぜなら、今の生活がめぐまれているなんて、考えたこともなかったからだ。

とつ然、戦争に大切な家族や時間をうばわれてしまったひいおじいちゃんは、どれくらい不自由な生活をしてきたのだろう。寒さから守るために、自分の足のうらと足のうらをこすり合わせて体を温めていた話も聞いた。今は昔の出来事のように話をしてくれるけれど、その時はきつと、悲しんでいるひまもないくらい、生きるために命がけだったんだなと感じた。

今は戦争を知らない人がどんどんふえている。わたしもその中の一人だったけれど、学校のじゅ業をきっかけに戦争について調べようになった。インターネットや本にも戦争のことはのっているけれど、けい験した人の話の方がどんなじょうほうより重きで、一つ一つの言葉に意味があると分かった。

わたしがひいおじいちゃんに言われて気付いたように、今の生活が当たり前ではなく、めぐまれすぎていることにみんなが気付いてほしいと思う。今は便利で、自由な生活だけれど、その生活があるのは、不自由な生活を乗りこえた人達の苦労があったことをぜっ対にわすれてはいけない。そして、戦争を知らない人達が日じょうに感しやをしる生きることが出来たら、平和な未来につながっていくのではないか

と思う。これからもわたしは、ひいおじいちゃんから聞いた真実の声を、多くの人に伝えていくことが大切だと感じている。

平和な世界に

大平小学校 四年

松本 華

国語の授業で『一つの花』を勉強しました。

「一つだけちょうだい。一つだけ。」

と、おにぎりをほしがる小さなゆみ子に、

「一つだけあげよう。一つだけのお花、だいにするんだよう……。」
と言って、戦争に行くお父さんが一輪のコスモスの花を渡しました。いくらでもあるわけではない小さな幸せをつみ重ねて、大きな幸せにしてほしいという思いがありました。

この話を学習しながら、戦争について調べていたら、ひいおじいちゃんが戦争に行ったことを知り、おじいちゃんにいろいろ話を聞きました。

昭和十九年、ひいおじいちゃんが十五才の時、広島海軍飛行予科練習生になり、飛行訓練や海の訓練をしたそうです。そして、昭和二十一年八月十四日（終戦前日）に出げき命令が出て、長野県野辺山き地から出げきしたそうです。特別攻げき隊（特攻隊）は、片道分の燃料し

か入れないで逃げきするという、「必死」の作戦で逃げきしました。

ひいおじいちゃんは、松山の吉田浜飛行場で給油中に終戦を知りました。終戦を信じられない仲間の何人かは、そのまま飛んで行ったそうです。でも、ひいおじいちゃんは、

「せっかく助かった命を捨ててなるものか。」

と飛行場を飛びたつた後、野辺山き地にもどつたそうです。

にげ出したと思う人もいるかもしれませんが、私はひいおじいちゃんのはんだんは正しかったと思います。

私たちは学校で先生から平和について学んでいます。ひいおじいちゃんはばくだんをかかえたゼロ戦に乗って、ときに体当たりする方法を先生から教えてもらっていたのです。私たちは全然ちがう教育を受けていたんだなあと思いました。そして、戦争は本当にこわいなあと思いました。

ひいおじいちゃんは、「平和」とは、

「おなかいっぱい食べることができる。」

「安心してねることができる。」

「正しい教育を受けることができる。」

ことだと言っていたそうです。今年、パリでオリンピックがありました。どの国の選手も力いっぱい戦って、試合が終わると、だき合ったり、ハイタッチをしたりして、がんばったことをみとめ合い、はげましあっている様子が見られて、いいなあと思いました。オリンピックは、「スポーツを通じた人間育成」と世界平和を究きよく目的」としているそうです。今も世界の中で

は戦争をしている国があります。テレビのニュースを見て、悲しんでいる人がいっぱいいます。オリンピックで戦っている選手のように、国に関係なく、一つのものに向かってがんばっていけるような平和な世界になるといいなあと思います。

パリオリンピックから 戦争を考える

浮島小学校 六年

久保田 絢

今年、フランスでパリオリンピックが開かれました。コロナで行われた前回の東京オリンピックと比べ、観客が多く入り、パリは熱きよう的になっています。日本人選手が活やくし、メダルを多くかく得しており、これからの期待が高まります。

さて、そんなパリオリンピックですが、世界で問題が起きています。それは人権問題や戦争です。パリオリンピックの開会式では、性別関係無く、LGBTQを取り入れた新しいパフォーマンスがひろうされました。今、世界で考えられている多様性が実現されていて、とても素晴らしい取組だと思えます。しかし、その後のボクシング女子の試合で問題が起きました。昨年の世界選手権の性別テストで不合格となった二選手の出場を国際オリンピック委員会がみとめたこと、その二選

手は男性せん色体を持っていたことについて、物議をかもしていました。出場できる、できないのどちらにも根きよのある意見があり、私がかもし審判だったら、大変迷うと思います。現在の競技の出場基準では、人種は関係ありませんが、性別となるとどのように判断したらいいのか議論が必要になってくると感じます。

このような「ちがいが」をみとめ合えない感覚が人々の争いや戦争を引き起こすきっかけになっていくのではないのでしょうか。自分とちがうことを悪いことととらえたり、弱者をはいじょうしようとしたりする流れを止めることが、だれもがつらい思いや争いごとのない世界をつくっていくと思います。

はなやかに行われているオリンピックの最中ですが、現在もロシアによるウクライナしん攻や、イスラエルとイランとの戦争が続いています。それにより、実際に戦地へ行かなければならなくなってしまう選手や、オリンピックに出場できなくなってしまう選手もいます。私は、このような選手の話聞き、許せない気持ちになりました。戦争は、選手のひたむきな努力や、選手としての命を全て台無しにしてしまう、むなしなものだと思います。

このようなきせいを生まないために、「オリンピック休戦」という制度があります。それは、ギリシャ語で「エケケイリア」といい、「手をつなぐ」という意味です。今回のオリンピック開さいに向けても、この休戦決議が呼びかけられたようですが、実現することはありませんでした。オリンピックが真に平和の祭典と呼ばれるものであるなら、オリンピック休戦が実現されることで、全ての選手が自分の努力や可

能性を発きできる環境をつくり出していつてほしいと願います。

オリンピックは、命を取り合わない神せいな戦いです。命を取り合う残こくな戦いである戦争はやめ、選手一人一人が自分をこえる戦いを行うオリンピックに臨むことができる状況ようを切り開いてほしいと思います。世界が平和で、一人一人がやりたいことをやれる、平等な、そんな世界を私たちの考えで築いていきたいです。

炎

浮島小学校 六年

栗田健一郎

炎は

別の使い方をすれば

痛く苦しい

戦争は炎を武器に使った

炎は

その様な使い方をするものではない

炎は

未来を照らすものである

炎は

人の心の中にもある

にくしみの炎と

希望の炎

ぼくたちは

どれを大切にしたら良いのだろうか

あの日 広島と長崎に落とされた

原子ばくだん

炎が

街をのみこんだ

人をのみこんだ

思い出をのみこんだ

炎は全てをのみこんだ

けれど希望の炎は消せなかった

希望の炎を胸に

街を造り

人を育み

未来を目指し

平和を造った

平和の炎を守ろう

未来を生きていこう

戦後七十九年―戦争を知る

門池小学校 六年

伊藤 栞理

〔近衛歩兵第四連隊〕

これが曾祖父が終戦時に所属していた連隊だ。

母から曾祖父は戦争に行ったと聞いた。曾祖父は四十七年前に亡くなり、私はほとんど知らない。静岡県健康福祉部に軍歴照会をし、後日様々な資料の写しが届いた。これらから、曾祖父の戦地での足跡をたどった。

曾祖父は近衛師団に属し、マレー半島で「マレー作戦」「シンガポール攻略作戦」スマトラ島で「スマトラ作戦」「スマトラ島防衛作戦」などに参加した。六年間戦争に行っていたことになる。一つ一つの作戦がどのようなものだったのか分かりにくかったので、太平洋戦争の全体像を調べることから始めた。

太平洋戦争の原因の一つは、日本が石油などの地下資源に乏しかったことだ。これらを求め、南方の国々に侵攻した。開戦直後は兵器や物資の補給も比較的あったので、奇襲作戦などでどんどん勝ち進んだ。

しかし、アメリカの参戦が決まり、ミッドウェー海戦で大敗を喫してからは、連合国軍に制海、制空権を握られた。そのため物資の補給ができなくなり、兵器や食料の不足に陥り、多くの人が命を落とした。生きるために、生のネズミや戦友の死肉を食べたりもしたと聞く。戦争は人の体を傷つける。心も傷つける。復員してからも精神的トラブルに悩まされる人もいる。様々な面から人々の人生を壊すといえる。

戦争は兵士たちだけのことではない。国内に残った人たちも、人格を変えられてしまう。優しくなったほとんどの人も、心に余裕がなくなり、鬼のようになる。また、ゼロから生活をたて直すために、戦後も何十年と辛い思いをしながら生きていかなければならない。

戦争とは、その国にないものを欲しがり、軍事力や暴力で強奪しようとするのだ。戦争になったらどうなるのかを考えずに、武力行使に突き進む、想像力の欠如が引き起こす。

曾祖父は本当に運が良かった。祖母によると、船で移動していた時に、すぐ近くの船が撃沈されたり、戦闘中に隣にいた人に弾が当たって亡くなったこともあったそうだ。

戦争で人を一人殺すということは、後々に生まれるかもしれない何百人という子孫を殺すことと同じだ。例えば、祖母は戦後生まれなので、もし曾祖父が戦争で亡くなっていたら、私はここにいない。人が生まれるということは奇跡なのだ。奇跡が続いたからこそ、今の私たちがここにいるのだ。だから、毎秒毎秒を大切に生きていきたい。戦争をなくすために今私にできることは何だろう。まずは、多様性を尊重し、様々な意見を受け入れたい。批判的思考力を身につけ、物

事をいろいろな面から見えて検討し、自分の頭で考えたい。「普通」の中に平和がある。「普通」を大切にしていきたい。そして、平和のために何ができるか、考え続けたい。

今、ぼくたちができること

今沢小学校 五年

岸川修大

一九四五年八月十五日、第二次世界大戦が終結しました。この戦争で、日本は世界初のひびく国になりました。

ぼくは、最初は、戦争に興味がなかったけれど、いろんなノンフィクションの本を読んでいく内に、戦争にだんだん興味をもつようになってきました。

ぼくは、もっと戦争のことが知りたくなり、父の実家への帰省のタ イミングと重なったので、長崎の原ぼく資料館に行ってきました。そこには、「信じられない物」が集まっていました。めちゃくちゃにこわれた時計には、原ぼくが落とされた時こくがぎざまれています。原ぼくの熱で、原型もわからないままに変形したガラスもありました。他にも、信じられない物はたくさんあったけれど、特に印象に残ったものが二つあります。

一つ目は「黒こげになったお弁当箱」です。中のごはんまでまっ黒

な炭になっていました。ぼくにとつて、お弁当は、おいしい、楽しい、食べるとうれしくなる、幸せなイメージがあるもので、それを見たとき、戦争は、小さな幸せもこわしてしまふものだと感じました。

二つ目は「人の手の骨とガラス」です。ガイドさんが言うには、手にガラスを持ったまま亡くなった人の手とガラスが、高温で一体化してしまったとのことです。

見ていてとてもつらい気持ちになりましたが、残された物から、何があったのか、どんな被害を受けたのかを知ることができました。

このようなことをくり返さないために、私たちはこれから何をしていけばいいのか。それは、「みんなが知る」ことだと思います。原爆くを体験した「ひばく者」は、終戦七十九年をむかえた今年、とても少なくなっています。だからこそ、若者である私たちが戦争を知っていかなければならないと思ったのです。「どうせ昔の話なんでしょ。」「人が死ぬ話なんて聞きたくない。」と目をそむけてはいけない問題です。戦争中には、まだ生きたいと思いつながら亡くなった人はたくさんいたはずです。だから、その人たちの思いも背負って、ぼくたちは生きていかなければなりません。

もう一度、みんなで真剣に考えてみたいのです。ぼくたちはこれから何をすればいいのか。

ぼくは、戦争を知って、これから人をきずつけないようにしたいし、他の人の意見を理解しようとするなど、自分でできることから始めていきたいと思います。

戦争の恐ろしさ

沢田小学校 五年

中野 未悠

この本は、十二才のイエバ・スカリエツカさんのウクライナとロシアの戦争が始まってからの六十七日間の日記です。

私がこの本を読んだきっかけは、戦争のことをくわしく知りたかったからです。ニュースなどで見ていましたが、よく分からない事が多くて、この本は自分と年が近い女の子が書いた日記なので分かりやすいと思ったからです。

イエバさんは、二月十四日がたん生日だったそうです。その十日後の二十四日、午前五時十分にウクライナはロシアからしゅうげきを受けました。その時、イエバさんは絶望して、パニック発作を起こし、恐怖におしつぶされそうだったそうです。ひなんするため地下室に行きました。数えきれないほどの多くの爆発音が聞こえたそうです。私は、この場面を読んだだけで、とてもこわくなりました。もし今、日本に戦争が起こることを考えると恐ろしくてたまりません。

その後、六日目にイエバさんのアパートの自宅のキッチンにミサイルがうちこまれてしまったそうです。イエバさんはこの時家をずたずたに傷つけられるのは、自分の一部を傷つけられるのと同じと、日記に書きました。

それからイエバさんは、ひなんするために住んでいた東部のハルキウから、西部の方へ向かうと決めて動きました。自分の住んでいた町からはなれるのはとてもさびしいし辛かったと思います。そして、ポランティアをはじめとする多くの年から支えんを得て、十六日目にハルキウから遠くはなれた、アイルランドのダブリンへ行くことができました。イエバさんの友達の中にはハルキウに残っている人もいます。うです。私だったら、こんなにすぐ遠くに行く決断はできないと思います。でも生きるためなら仕方なかったのだと思います。

三十七日目にはダブリンの学校に通えるようになり、六十七日目に家を借り、住めることになったそうです。今までの生活とはちがうけれど、少しは前に進むことができて良かったと思いました。

この本を読んで、戦争の恐ろしさがよく分かりました。どれだけの犠牲者が出るのか、またはすでにどれほどたくさん犠牲がはらわれているのか不安だらけです。当たり前の日常が幸せだということを感じました。私は経験したことはないけれど、うるさい爆発音、ほうげきがまき散らす恐怖感などが次々とおそってきたようで、二才年上のイエバさんがそれを経験したと考えると戦争は、決して他人事ではないと思います。

この戦争は今でも続いています。早く終わってほしいと願うばかりです。

沖繩で考えた平和

原東小学校 六年

前田七輝

ぼくの祖母は、市内の小中学生にむけた、「戦時体験出前授業」のお手伝いを何年もしています。この出前授業は、戦争中に沼津で七名の方が体験された事を、図や手作りの道具などを使いながらわかりやすく伝える授業だそうです。

伝える内容は、沼津をおそった空しゅうから命からがらにげた話や、落ちてくる爆弾を鉛筆だと思いうらい物がなくて苦しかった生活の話や、国のため出征し、帰ってこなかった父親の話などだそうです。祖母はお手伝いなので、同じ話を何十回も聞いています。それなのに、聞くたびに涙が出て胸が苦しくなると言います。

ぼくは、この沼津でも戦争の被害があり、悲しい思いをした人がいた事を知りました。

沖繩へ旅行した時、祖母のたつての願いで平和祈念公園に行きました。庭園には、「平和のいしじ」という沖繩戦で亡くなった全ての人々の氏名を刻んだ碑がありました。あまりの量の多さに、ぼくは圧倒されました。たくさんの方の中に「松田ヒデの子」と刻んであるのを見つけました。名前さえはつきりしないとても幼い子までも、犠牲になっっていることを知りました。なんだかすごくさびしくて、悲しい気

持ちになりました。

資料館の中には、いろいろな展示室がありました。戦争で何があったのかを記した、当事者のことばをずっと読んでいた母は、

「米軍が上陸して、一般の人がどれだけつらく大変な思いをしたかわかった。」

と、暗い顔で言いました。住人の受けた惨劇の様子をガマと呼ばれる穴の中で見た時、ぼくは同じ人間なのに敵とみなして、残こくな手段で殺す事をする人間のおそろしさを感じました。人の正しい判断をくわらせてしまうのが、戦争なんだと思いました。

社会の授業で一番最初に、戦後作られた日本国憲法三つの柱を学びました。沖繩に来て「平和主義」の意味が少しわかったような気がします。

沖繩の平和のいしじは、

「世界の恒久平和を願い、国籍や軍人、民間人の区別なく刻まれた。」といえます。ぼくの考える平和主義とは、

「生まれ、性別、障害の有無に関係なく、人々が平等にくらせること。むだな争いをしないこと。人をきずつけず誰もがお互いの人権を守ること。」

だと思えます。

テレビからは、毎日のように国同士の争いが報じられます。ぼくはこれからもっと世の中の様子に興味を持ち、知った事に自分なりの考えを持つていこうと思います。そして、戦争で苦しむ人や悲しい思いをする人のいない世界になってほしいと思います。

特攻の真実と私の正義

第一中学校 三年

植松 れいみ

大空へ駆け出す飛行機

連合軍に体当たりする

生きて帰ることは許されない

圧倒的な恐怖

過酷な運命

出撃命令

戦場で命を散らす

名誉と勝利

生き残る可能性のない特攻

本当は死にたくない

家族と共に生きていたい

自分の夢を叶えたい

誰も止められなかった

特攻の真実